

# 詠物歌の位置

## 中西進

一  
懷風藻の序には

旋招文学之士時開置禮之遊當此之遊辰翰垂文賢臣獻頌

という記事があるが、この宴に於ける詩賦は顯宗紀元年の「三月上巳幸後苑曲水宴」とあるのが、史書に現われた最初である。懷風藻の記事は天智朝をさしているが、この記事以前に遊宴における詩賦を明示したものはない。以後聖武朝、天平六年には「秋七月丙寅天皇：是夕徙御南苑命文人賦七夕之詩」とあり、明らかに詩賦の事が知られるが、一方、万葉集に見える宴の歌は四八二首にのぼり、集の重要な一面である事は云う迄もない。

そして、この宴の定着する姿は詩宴であり、ある題詠の為に設けられるものである。詠物と題詠とに關しては小沢正夫氏は、題詠が詠物歌から發生する系路も存するが、詠物は題詠により近い点もあると區別された（一句題詩と句題和歌一語語と）が、王朝の所謂題詠とは異つてもその間の濃いつながりを否定する事は出来ず、岡崎義恵博士は、日本の詠物的作品は題詠と關聯して發達したとされている（日本文芸の概説）。万葉集の詠の歌が、それを目的として設けられた宴に於いてではなく、往々にして感興の赴くところから歌われているのは、かかる題詠との關係を語つてもいゝるわけであるが、何れにし

る、詠の歌は宴と不可分の關連を持ち、それは多分に文芸の進化に伴う發想であると云つて、差つかえない。

こうした詠の歌が、万葉集にどのような姿をとつているか、以下それを若干眺めてみたい。集中には凡そ二分されると思われる「詠」の意味があるが、その点や「賦」との關係、客觀叙景歌の發生などは措いて、暫く詠詩に則つて考えられるもののみについて言及しよう。

## 二

詠の歌は、明らかに素朴な自己表現ではなくて、文芸性の強いものである。この文芸の意識は、我國文化の進展と相俟つた海彼の思想をなおざりにして成立するものではない。ここで暫くの間をつつて、大陸における詠がいかなる有様であるかを見ると、既に青木正見博士が詳細に論じられた（支那文芸術考）如く、鮑照のそれを先驅的作品として、齊梁間に起り、初唐に至つて隆盛となつている。

その間から試みに玉台新詠集と文選とを取上げてみると、玉台には約六十首の詠詩が見られ、卷五を比較的多として各卷に散在している。そしてこれらは七夕のような伝説をよむもの他、大半が身辺に見られるものを対象としており、まゝ物語的な世界を歌つている。部立として詩体をとるこの集に於いては、分類の基準にはなつ

ていないが、雑詩の中に含まれる事が万葉集の場合を考え合わせ、注目される。又「雑詠×首」と記され、元來歌う意の詠が、詩とほぼ同様に用いられている事も、当時の用法として万葉集と同様である。文選に於ては、詠を意識した部立をとり、詠史、詠懷という項目を見る。これは詠の四四三首中一二%に当るもので、それぞれ二一首、一九首を含み、他に勸励二首も準じて考える事が出来る。然し、卷十五一巻を占める雑詩の中に多くの詠があり、詠としては史と懷との二つを取出したまま、他は一括されたものと考えられる。それも万葉集の雑歌という部立と似ている。雑詩中から拾つてみると、

詠貧士 陶淵明

詠七月七日夜牛女 謝惠連

応王中丞思遠詠月 沈休文

詠湖中鴈 同

の如くである。更にこうした「詠」の形をとらぬものに詠の詩は多くあるので、曹子建の樂府詩四首、陸士衡の樂府詩十七首、鮑明遠の樂府詩八首など、樂府題のものはすべて、ある題の意識の下に作られたものである。擬古詩にしてもその態度は同じであろうし、補亡詩にしても同じである。例えばその一例をあげると、陸士衡の樂府詩十七首は

猛虎行 君子行 從軍行 予章行 苦寒行 飲馬長城窟行 門  
有車馬客行 君子有所思行 齊謳行 日出東南隅行(或曰讎)長安  
有狹邪行 前緩声歌 長歌行 吳趨行 塘上行 悲哉行 短歌  
行

であり、素材と心境との限定から詩が始められそれに擬え代つて歌おうというのである。こうした詩が流行した事自体が大きな詠詩の流れとも云えるのであつて、唐に到つても同様樂府題のものとして

從軍行 楊炯

孟門行 崔顥

吳宮怨 衛万

らが挙げられるのである。李嶠の百二十詠は青木博士(前掲書)以来多く云われているが、万葉集のそれと類似の立場のものをあげれば、杜審言の「蓬萊三殿侍宴奉勅詠終南山」の如きを見る事が出来る。然し、六朝に先立つては辭賦の形に同様態度のものが見られるのみで、実情からの遊離に遊ぶのが、六朝から初唐にかけての傾向である事も、万葉集を傍においた場合に、注意されるべき事となるのである。

懷風藻に於いても、かかる詠詩の例は多く、詠は三一首をもち、全体の約四分の一余を占めている。これは先に見た文選の詩の中の割合とほぼ匹敵するものであるが、その内容を見ると、詠物は四首であり、他は詠懷として文選に扱われている類のものである。これは述懐と記されたものが多く、述志、秋日言志、山齋言志らも含められるが、それぞれ特殊な立場に立つての詠懷も多い。詠物の素材は月、雪、孤松、そして美人であり、先の玉台新詠集にとりあげられたものとはほぼ同様の趣を示している。又この他に七夕、重陽といった節宴における詠は大半に題詠的制約をうけるのであり、例えば万葉集の家持の「私陳拙懷一首并短歌」(20四三六〇—二)は、場所として想像しているのは從駕の宴での応制で、かかる歌を詠むべく実体のない空想をする。宴や、從駕の宴での応制が一つの題として家持に与えられているのであつて、例えていえば、「詠從駕宴恋詔」といったものである。従つて、この詠詩は宴と不可分のものである事は先述の如く、云つてみれば宴と共に發展して来たといえる。この上に更に応制という条件が加わつて、詠・宴・応制は相連絡し合う一団のものとして、史上の位置づけを得る事が作品によつ

て判るのである。

そして以上の大陸における文選・玉台新詠集・唐詩と懷風藻を比較してみる時、共々に題詠的作品を含む事は等しいが、玉台は文選に比して驚く程詠物詩が多い。文選の詠物詩に対する態度は全く冷淡であつて、詠史・詠懷を意識的に取出している事は既に述べたが、文選が一つの詩文の軌範として厳密な検討の上に立つてゐる事は、周知の事実なのである。然し又、詠物詩が玉台に於いて「雜詩×首」という小見出の中に現われ、文選の雜詩という部立の中に見える事は共通するのであつて、つまりは詠物というものが詩的態度として、樂府題のものを含めて大きく當時の詠にかかわりあつていたものの、正式或は公的な詩の分類の一つとしては取上げられていないのである。ここで、その詠物の素材は、いみじくもそうした取扱いと符合し、又作品集としての文選と玉台との性質も、軌を一にしているかと思われる。そうした性質は懷風藻を顧みる時、懷風藻が月・美人という玉台と全く等しい素材をもち、長屋王の周辺を中心として成立している事に、全く似通つてゐるといつていいである。

### 三

ここで、万葉集の作品について見る事にしたい。万葉集にあつては、詠の歌は二つの取扱いをうけ、その一つは部立として一纏めに収められたものであり、その一つは折々の他の要素・編年とか、作者とかによつて収められたものである。先ずその第一のものをみると、詠月といつた先述のものに多く現われたものを始めとして、卷七と卷十とに収められ、卷七は全体を雜歌と総括した後、「詠一」という分類を施し、その七十二首の後には

芳野作

山背作

羈旅作

として旅という点で纏め、次いで

問答

臨時

就所発思

寄物発思

行路

旋頭歌

と區別して雜歌を終えている。この部立は無論他のあらゆる場合と同じく雜然としてゐるが、常に意識して記してゐる旋頭歌を除くと、

羈旅作・芳野作・山背作・行路

問答・臨時

詠物・就所發思・寄物發思

と、ほぼ三つに整理され、全体をやや連ねてゐると思われる態度は、制作過程に関する分類の意識である。即ち、立場の条件、人間關係、發想の形式という分類である。そこで考えられる事は詠天・詠月……といつた詠物歌に対する編者の考え方が、先ず制作過程に於ける一特性と考え、發想の面では就所發思や寄物發思と相異なるものとしてゐるといふ事である。就所發思は歌われる対象が手法上にある、目的は他に向つて發思するものであるが、詠物は対象そのものを歌う事に目的も手法もあるわけで、右の分類から、詠物歌が制作過程上の一特性にあり、その特性は対象そのものに目的も手法もあるといふ解釈を導き出せる事は、至極当然の事のようにでありながら、分類者の明確な意識を語つてゐるのである。

卷十の場合、春雜歌と一括された中で初めて雜歌をおき、詠物

をおき、以下

野遊

歎旧

權逢

旋頭歌

譬喻歌

とあり、夏雑歌は詠物のあと、

問答

譬喻歌

を、秋雑歌は七夕をあげて詠物を並べ、各雑歌は無題のもの、(これは目録には雑歌と題されている)四首の他、すべて詠物である。これらについて岡崎博士は、歎旧の如き詠物以外の目を含むところに編纂意識の不確実さを示すといわれた(「古代日本の文」が、近く、土橋寛氏が、詠煙・野遊・歎旧という配列に一貫性を見られた(「老人國語と國文学四」)のも優れた注目であると思われる。これは原資料の倂を示しているわけであるが、分類から云えば、歎旧、權逢を一括して詠懐といひ得る。旋頭歌はここでも特別な意識でとりあげられているが、元来これは問答に発するものであり、譬喻歌は発想態度の異つてゐるもので、春の部の分類は、つまりは、巻七に準じていえば同様行旅、詠物、詠懐、問答となる。夏のそれも詠と問答という、明瞭に発想の違いを意識した分類であり、秋・冬はすべて詠物である。この内七夕が秋の詠物の中に含まれるという事は先の玉台新詠における態度と全く同一であると云わねばならない。こうして、巻十の編者の解釈は詠懐を意にとじて詠物と並行させ、発想が譬喻・問答と対比するものとしていたのであつて、両巻の編纂を通して詠というものが当時の明白な意識であつた事を語つてゐる。ただ一つ、問題になるのは巻七、一二五一からの四首で、「問答」

と記されている。内容からという詠物の觀念から余程離れていて、二首一群としてそれぞれ鳥・海人を基とする相聞である。一方巻十をみると「問答」は雑歌の中に含まれ、一九七六―七を通して二者間の贈答になつてゐる。その相聞の内容を見ると、寄物の大群の他は贈漫 悲別 問答 譬喻歌 旋頭歌

をもつてゐる。贈漫は寄物陳思を特別な形であげたもので、悲別は恋の意に於いて相聞の範疇に帰せられたものである。そうすると「問答」は寄物・譬喻を相聞の手段と考へてゐるので、これは集の原則的な部立が雑歌・相聞・挽歌であるのに対して、巻七が雑歌・譬喻歌・挽歌となつてゐる事によつても知られるが、ここで「問答」の最も生命とするものが愛恋の感情である事を認めねばならぬのである。この分類の意味については、既に竹内金治郎博士(「萬葉の寄物陳思歌」一頁以下)・山崎馨氏(「上」二九頁以下)・青木生子氏(「萬葉正述心緒歌」同上)らによつて委曲が尽されてゐて、最早喋々する迄もないが、問題のこの四首について、左注はそれぞれ前の一首ずつに付せられていたものと思われる。それに対する答を一括して編纂した事が、この「問答」という分類を生んだのである。そう考へれば、何らこれらが「詠」の歌たる事と矛盾しないが、然し、この場合ですら、厳密にいへば、相聞に用ゐる資格に於いて「賦」から「比」へ移行するのであり(山岸徳平博士は六義の影響を強く万葉集に感じておられる(「萬葉集と上代詩」一頁以下))、この分類に於いて高級な歌学的意識をまで想像する事は、出来ないのである。

#### 四

次に詠物内部に立入つて、その素材について考へてみると、巻七にあげられたものは

天一首 月 一八首

雲 三首 雨 二首  
山 七首 丘 一首  
河 一六首  
露 一首

花 一首 葉 二首 蘿 一首 草 一首 鳥 三首

井 二首 倭琴 一首

という十五種六十首であるが、この配列順は中国の類書の影響をうけたとする説が早く岩城準太郎氏によつて説えられ、以下岡崎博士・小沢氏によつて継承されているが、その中では特に爾雅が取上げられた。その順は話・言・訓・親・官・器・葉・天・地・丘・山・水・艸・木・虫・魚・鳥・獸である。近くは芸文類聚の分類によつたかという論もあるが、試みに和名抄にこれを徴してみると、

景宿類第一 (天)・月

雲雨類第二 雲・雨

(風雪類第三 (露)

山谷類第四 (山)・丘

(水泉類第九 井)

河海類第一〇 河

……  
(琴瑟類第四七 倭琴)

羽族類第三〇 鳥

草類第二四二 草

苔類第二四三 蘿

木具第二四九 葉・花

となつてゐる。(もつともこれは二十巻本で古いといわれる十巻本

では多少食いちがう)集の井、倭琴は詠物の配列が終つて、故郷を偲う二首を距てているので、明瞭な編纂意図の外にあると思われるが、すると天・月・雲・雨という順に整然と現われ、露を除くと山・丘・河とつづいて最初の群を終る。この露も、明細な順は前後するけれども、天然現象を現わすこれらに含まれているのである。そして又和名抄も最終の群として鳥・草・蘿・葉・花をおいているのであつて、面白い事にこの順序は逆に万葉集の順序と一致する。和名抄には「万葉集」云々という記事もあり影響関係でいえば逆の関係も考えられるが、私はそうした影響関係よりこれら巻七の配列が、意識的な当時の分類に従つてゐる事の方をより注目したのである。

巻十の詠物の内容は後掲の表の如くであるが、これらを通して大きく注目される事は、先にあげた玉台の素材が日常生活の身辺にあつたのに対して、悉く自然の風物である。これはごく特殊な例外を除くと詠物の素材全般について云える事であり、大陸との異質を思わせるのである。大陸の詠物は詩想の一つとして物体を直叙するという手法の中に生まれたが、集の詠物は自然に遊ぶという趣を呈している。(なお他に七夕の九八首が秋にある)

	春	夏	秋	冬	計
月	3		7	1	11
花	20	10	34	5	69
鳥	24	27	2		53
川	1		1		2
雨	1		4		5
煙	1				1
柳	8				8
霞	3				3
蟬		1	1		2
榛		1			1
雁			13		13
鹿			16		16
鳴			3		3
蟋			5		5
蟀			9	1	10
露			1		1
山			41	1	42
葉			3		3
田			3		3
水			1		1
風			1		1
芳					
霜					
雪				9	9
計	61	39	145	17	262

類題的に云うと最も多いのは花で六十九首。鳥は五十三首、黄葉は四十二首で、これらも他を圧し、集約するならば万葉人たちは花と鳥と、そして黄葉の中に生活したという事になるのである。又これらに次ぐものとして鹿鳴の十六首、雁の十三首があげられるが、多くの動物の中から一種類をもつてかく多く歌われるという事に、これらに寄せられた大きな関心を酌みとる事が出来る。そしてこれらは秋に限つて現われるものであるが、すべて秋は他季の三倍から九倍の歌数を持ち、ついで春が多い事になる。

あの額田王の春秋争いの長歌は詠物歌の最初とも云える性質をもつているが、普書四夷伝倭には

不知正歳四節但計秋收之時以為年記  
と見え、魏志東夷伝倭人の裴松注には

其俗不知正歳四時但記春耕秋收為年記  
と我国古代の風習をのべている。何れの国に於いても原始社会に農耕が生活のすべてである時代、春耕秋收のみが必要な知識である事は当然であろうが、それによつて記年する事はその習慣化を思わせ、曆法の伝来以前にかなり遅くまで春秋を取上げる気持があつたと思われる。かの記の春秋二神の争いも、その心理的な残影を空想させ、曆法によつてなくなつてしまつた後までも、伝統的な生活感情として払拭出来ない残渣となつていたのでないかと考える。

然し、勿論これは情越としての春秋を意味しているのではない。その上にもう一つの要素が重ねられる時期があつた。それは大陸からの渡来と、生活水準自身の向上による情趣感で、「秋風已起」という藤原曆の詩はその公約数である。額田王の結論は、いち早くこの一四五首という数字を予告したものと私は考えるのであり、古来の風土性に文学的趣味性が重ねられ、秋の歌が多くなつたと思うのである。

更にこれを確めるべく、もう一つの例をひくと、これ程秋の歌が多いにも拘らず鳥についての歌は春夏で殆どである。それは鳥が鶯と雀公鳥とを表わしているからである。内、雀公鳥は半ば伝説上のものであり、蜀魂の情趣の中に生きている鳥である。その鳥の歌はあまた大陸的雰囲気を湛えているが、歌体についても、所謂律詩体の長歌をもつ。

丈夫が出で立ち向ふ故郷の神名備山に

「明け来れば柘の小枝に

「春されば小松が若末に

「里人の聞き恋ふるまで

「山彦の答響むまで

霍公鳥妻恋すらしき夜中に鳴く (一九四)

卷十の詠物の内容が先掲の如き季節的片寄りを示している事は、この巻の成立の新しさも語つていたのであるが、これら詠物の素材を風土性のみ理解する事が誤りであり、特に後述の奈良期末期の詠物を参照すれば、秋の情趣が一つの類型として把握されるべきである事も云えるのである。

## 五

然し、この分類が歌の制作とは、ややかけ離れている事も考えられねばならない。岡田正之博士〔近江奈良期の〕・青木正児博士〔書二頁〕・山岸博士〔前掲論文〕らは詠物歌における中国詩の影響を論じられたが、一方岡崎博士〔文芸二二二頁〕・小沢氏〔分類と詠物〕國語と國文學昭和三〕はそれに疑問をもたれ、制作と分類との區別を云われたが、近くは尾崎暢映氏も同じ態度をとつておられる〔日本文学論究十七四年三月〕。これらについて、何れか一方をとる事は画一論に陥る危険性を有しているであろうが、唐詩の詠物は自らを述べる傾向の

ある事もいわれていて、従うべきであろう。

この「詠」を一層強く意識するのは以上両巻以外に収められた詠の歌であろう。これらにかかわる意識は、つまりは分類の意識と等しいのである。

そこで他の巻の詠の歌が問題となるが、霍公鳥については

詠霍公鳥一首并短歌 9 二五五・六(高橋虫集)

詠霍公鳥歌二首 17 元〇九・〇(大伴書持)

詠霍公鳥歌二首 17 元二一・三(贈家持)

(右答歌) 三首 17 元二一・三(親送書持)

詠霍公鳥并時花歌一首短歌 19 四六六・八(難未及時依興)

詠霍公鳥歌二首 19 四五五・六(大伴)

詠霍公鳥并藤花一首并短歌 19 四九三・三(右)

詠霍公鳥一首并短歌 19 四九〇・〇(久米)

詠霍公鳥歌一首 20 四三〇・五(大伴)

これらはすべて詠物歌の体をとるものであるが「預作」「和」らは自ら一定の制限を受ける点題詠のものになるので、これは四月一日のそれも相等しい。右がこうした作歌上の特殊事情をもっている事も著しい特色であるが、又殆どが家持及びその周辺の人々の作である事も注目に価すべく、爛熟期万葉の見せる特徴という事が出来る。これは先に情趣感といった事をより有力に支えてくれるものであるが、巻十が内容的には「来鳴き響す」という類型的なもの他に古朴な抒情を持っていたのに対し、これは全く類型的なのである。

霍公鳥と関連をもつのは橘であるが、

橘歌一首 8 二四六(遊行)

があり、鶯の歌は

山部赤人詠春鶯歌一首 17 元五

と見え、「随聞」によつて家持に記されたものである。巻十に十一

首を見た月の歌も

安倍朝臣虫鷹月歌一首 6 六〇

大伴坂上郎女月歌三首 6 六一・三

豊前国娘子月歌一首、6 六四

湯原王月歌二首 6 六五・六

藤原八束朝臣月歌一首 6 六七

坂上郎女初月歌一首 6 六九

大伴宿禰家持初月歌一首 6 九四

と見える。これらは既に分明なように九八〇以下種々の月の歌を集めているのであり、類纂の意図の中に月が入りこんでいる事を示しているが、郎女・家持に至る間に挟まれた歌もほぼ詠物的作品であり、月がかかる立場で考えられていた事になる。更に九八三の左注は「右一首歌或云月別名曰佐敷良衣壮士也縁此辞作此歌」といつており、全く遊戯的な発想によつているのであり、これが年代的に見て虫麻呂以前に鑑賞の対象としての月がない事から、奈良朝以後の現象という事になる。

詠鳴鹿歌一首并短歌 9 二七六・三(成云補考)

とあるものは巻十にも「詠鹿鳴歌」として見えたものと同趣のものだが、「鹿鳴」という用字は懐風藻にもあり毛詩小雅の言葉である。「鳴」を添える意識は、或る典拠を意識したものであるかもしれない。

二月十九日左大臣橘家宴見攀折柳条歌一首 19 四七九(大伴)

を一例として「攀折」る花を詠む歌も多いが、柳は内容的には無関係だが唐詩にも段成式の「折楊柳」があり、風習としてうけついでいるものと習われる。その他「門部王詠東市之樹作歌一首」(3 三〇)「詠庭中牛麦花歌一首」(18 四〇)「八日詠白大鷹歌一首并短歌」(19 四二五・六)「詠山振花歌一首并短歌」(19 四六五・六)の如く「詠」と

呼ばれたもの、「紀朝臣鹿人見茂岡之松歌一首」(690)の如く「見」と記されていて、それを詠んでいるもの、先にあげた「攀折」型のものとして例えば「見攀折保宝葉歌一首」(1933)の如きもの、又は全く題詞には態度を示さず対象のみを記した「梅花歌三十二首」(545-546)の如きもの等、枚挙に遑ないが、「当所誦詠古歌」とされ、左注に「詠雲」とされたもの(1533)を始めとして遣新羅使の船上景物の幾つかも、その内に考える事が出来る。贈献の歌は

詠仙人形 926(入麿歌集所出)

：黄葉沢蘭一株拔取：遣賜：御歌一首 1933

等、先に見た題詠性が考えられるが、家持と池主との間に贈答された七首(1833-1837)は全く、詩的立場の条件を完備していくようである。特に

沙弥满誓詠綿一首

しらぬひ筑紫の綿は身に著けていまだはきねど暖けく見ゆ

(333)

は恋の寓意と見る説もあるが、先の玉台新詠との比較で、集中全く見られなかつた日常生活的素材を扱つていて注目されるものである。ここに正しい意味の詠物歌の第一の成立があつたと見るべきで、養老七年、処は大宰府である。

以上述べて来たものは大体詠物歌の普通の形をとつたものであるが、この中に含まれるものとして、巻十六に纏められる、「詠数種物歌」がある。

長忌寸意吉麻呂歌八首 1641-1648

忌部首詠数種物歌 1649

境部王詠数種物歌 1650

作主末詳歌一首 1651

府官設酒食誘右兵衛関荷葉作歌(録) 1652

高宮王詠数種物歌二首 1653

ら十六首歌である。これらは既に月の歌についてそうであつたよう一括して類纂的に纏められており、又これらを悉く「詠」とよびなしている事も編者の一態度を窺わしめるものである。これらは三八二四・三八三七の左注によつて宴席の余興であらうと思われ、その為には有縁歌及雑歌として収められているものであるが、極度に遊戯性が強い。境部王は穂積親王の子であり、その親王は宴飲酒酣の時に遊戯歌を誦したといわれる(64注)ので、一つの諧謔の流れともいふべきものを想像せしめるが、構成上も典拠を持ち(拙稿「万葉集に学灯社国月昭」作主末詳の歌の「梨親」は遊仙窟によるものだと土橋寛氏は云われ(「遊仙窟と万葉集」三八三・四の歌に)、又高宮王の歌には「涿羅門」が現われ、天平八年来朝の菩提仙那をさして、これらの歌は悉く新味の世界にある。この物名(所謂物名とは)は後世大きく取扱われるようになるが、これも元を毛詩に求める説がある。然し毛詩の知識は無論あるにしても、それより大きく働いているのは詩歌をめぐる雰囲気であらう。宴を中心とするその風が、当時部分的にしろ、あつたと思われるのである。

尚、詠の第二のものとして詠懐の歌があるが、先にあげた数旧・權逢らがそれで内容としても

物皆は新しきよし唯人は旧りぬるのみしよろしかるべし 1026  
の如く清純とはいえないものをもち、詠の周辺の進展の度合を最もよく現わしている。然し部立として現われるものは述心緒・陳思・発思といつた言葉で、且詠と歌と異質に扱われている。文選には先に触れた如く部立として掲げられ、

詠懐詩十七首 阮嗣宗 秋懷詩 謝惠連 臨終詩 歐陽堅石  
らを見、懷風藻はじかにそれをうけているのであつて、この間には



大きな距りを感じなければならぬ。

又詠史もその三として挙げられるもので、文選には

詠史詩 王仲宣 三良詩 曹子建 詠史詩八首 左大冲 詠史詩  
張景陽 覽古詩 盧子諒 張子房詩 謝安遠 秋胡詩 顏  
延年 五君詠五首 同 詠史詩 鮑明遠 詠電將軍北伐 詩虞

子陽

ら十種が卷十一に収められているが、集はこれについても編纂上意識していない。懷風藻には「過神納言墟」や「和藤江守詠裨穀山先考之旧禪旭柳樹之作」があるが、内容的に漢籍のそれと異つていゝ。集では挽歌に含まれるものもそうであつて、結局旧居を悼んで抒情の型に溶かし込むか、虫鷹らに見られるような伝説なり歴史なりの直接描写の部分のみに、取入れられているかである。

## 六

以上「詠」について、これが集中の大きな位置を占めているものである事を確認した上で、大陸の範に従うならばそれらが詠物・詠懐、詠史を含む事から、それを見て来たが、集中の詠は殆どが詠物歌であり、他二つは詠として取扱いをうけていない。思うに、先に触れた如く、詠懐、詠史の発想手段と、詠物のそれとは、異質なものがあつて、特に詠懐に於てそれは著しい。詠史は漢詩の内容に徴しても明確に史実に直面する形式であり、詠物に近いものであるが、集中それを意識する事の少ないのは、一つには歴史観の未熟を意味するのであり、一つには別形に分類されるという取扱ひ上の相違である。

そして又、詠物詩は当時の漢籍に部立として現われる事なく、集と全く逆の立場をとつているが、大きく云えば雑詩・雑歌の中に含まれる意識は等しい。又、集の詠物歌は大體二種の趣を呈するもの

であり、一つは詠という分類をうけながら、古朴で自然詠を内容とするものであり、他は詠の尖端とも云うべき物名歌までをも含める、日常身辺的な題詠である。後者は玉台の詠の素材とも類似し、玉台を摸したといわれる荆助仁の「詠美人」が夥しい故事のみを連ねているように、又その作者圏がおおむね奈良朝末期に限られているように、既に清純さを失つた、換言すれば文芸的な作品群である。この両者を等しく詠と呼ぶ所以は、後者に属する人の編纂意図であるが、又この両者の内容のひらきは、自然の景物に目をそぐ心から出發し、宴という場、贈答という条件が加わつて、前者から後者へ、題詠化の途を辿つたと思われる。この、「詠数種歌」に到つて終る経路は、文芸の爛熟というものに他ならない。卷七・卷十の歌が他巻と交通している事は佐佐木信綱博士の整理（万葉集の研究、第三）によつても窺え、小沢氏も言及しておられる（前掲「万葉集作者不」）が、窪田空穂氏は卷七の編纂者に「分類を好む傾向の著しいもののである」事を認めておられ（万葉集評釈）、「詠」と題された両巻の歌が作者の関与しなかつたかもしれぬ範疇に入れられていたかもしれない。然し、それらの作を「詠」の発想のものと断定する態度の中に、当時の歌物の觀念がひそんでいたのであり、そうして認められた詠物歌こそ、詩学的裏付をもつた漢詩の詠物への適否より一層大切な意味をもつのである。万葉集の詠物歌の位置はそこにある。

付記 本稿は昭和三十二年十月、東大古典文学会で口頭報告した

草稿に以後の管見を加えて三十四年七月に脱稿したものであるが、「上代文学」の休刊に伴つて編集部に眠る結果となつた。今読み返して大綱に考えの変更がない為更に纏つて活字にする事にした。余り旧稿に属するもので一言を添える。

(36・2・18)

(東京学芸大学助手)